



ATHLETE ALLY



東京2020オリンピック・ パラリンピック競技大会における LGBTQ+ アスリートの メディアガイドライン

ジャーナリストおよびメディア関係者への手引き

目次

1 はじめに	3
2 基礎用語	4
3 トランスジェンダーアスリートの報道に関するベスト・プラクティス	7
4 トランスジェンダーのアスリートに関するオリンピックの規定	8
5 注目のLGBTQ+アスリートたち	9
6 オリンピックにおけるLGBTQ+アスリートの歴史	12
7 スポーツにおけるSOGIESC（ソジースク）差別とアンチトランスジェンダーのヘイトの増加	13
8 アンチLGBTQ+活動家およびメディアの誤情報	16
9 日本のLGBTQ+の状況	18
10 日本のLGBTQ+サポート団体	19
11 日本のLGBTQ+ アスリート	20



はじめに

今回の東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会には、史上最多のカミングアウトしたLGBTQ+アスリートたち——本ガイドライン(日本語版)の発行時点で少なくとも163名(『アウト・スポーツ(<https://www.outsports.com/>)』の2021年7月19日時点の独自調査より)——が世界各国から集まり、参加します¹。LGBTQ+のアスリートは、おそらく古代ギリシャで競技大会が始まった当初からオリンピックやパラリンピックで競い合っていたはずで、しかし今世紀になって初めて、LGBTQ+のアスリートはファンやスポンサーの温かい支援や応援を受けながら、ありのままの自分として堂々と競うことができるようになりました。

カミングアウトしたアスリートが多くの人々から受け入れられ脚光を浴びるにつれ、世界各地の観客が、檜舞台で活躍するLGBTQ+アスリート一人ひとりのパフォーマンスを目にする機会が増えています。LGBTQ+のアスリートは、誇り、サポート、そして尊厳とともに、卓越したアスリートが持つ達成への渴望を糧に、自身の国の代表でありたいと思う、人として当然の希望を持っています。

オリンピック・パラリンピック競技大会は人類の祭典であり、全世界の才能あるアスリートが能力の限りを尽くして競う最高峰のスポーツイベントです。LGBTQ+アスリート取材にあたり、性的指向や性自認、身体構造における性的特徴だけでなく、アスリートが

直面する多くの課題や成功にも焦点を当ててください。LGBTQ+であることは、個人の一側面で、その側面は、その選手が取り組む競技やオリンピック・パラリンピック競技大会そのものに多大な貢献を与えます。

東京2020大会は、トランスジェンダーを公表するアスリートが自身の自認する性別カテゴリーで初めて参加資格を得た、歴史的なオリンピック・パラリンピック競技大会であるため、トランスジェンダーのアスリートたちは、今回独特な形で話題の対象となることでしょう。それと同時に、米国の複数の州、英国、ニュージーランドを含む世界の国々では、トランスジェンダーアスリートのスポーツ参加に対する激しい反発が起きています。

トランスジェンダーの人たちが人類の歴史を通じて、そしてあらゆる文化に常に存在してきたことをメディアが理解したうえで報道することは、極めて重要です。オリンピックを含むスポーツ大会への参加資格をトランスジェンダーアスリートに与える方針は2004年に採択されました。トランスジェンダーのアスリートが「不当な競争優位性」を得ているとの誤情報が発信されていますが、本大会はトランスジェンダーアスリートが自身の自認する性別カテゴリーで出場できるインクルーシブなガイドラインが作成されてから20年近くを経て、トランスジェンダーを公表する選手に自身の自認する性別カテゴリーでの参加資格が与えられた初めてのオリンピック・パラリンピック競技大会です。

2004年からこれまで54,000人以上もの選手がオリンピック・パラリンピック競技大会に参加しましたが、トランスジェンダーを公表して、自身の自認する性別カテゴリーで出場できた選手は今大会に出場するニュージーランドの重量挙げ選手、ローレル・ハバード選手が参加資格を得るまで、1人もいませんでした。トランスジェンダーアスリートが不当な競争優位性を持つという証拠や、トランスジェンダーの人々がスポーツを支配する、あるいは将来的にそうなるという証拠はありません。

本ガイドは、スポーツにおけるLGBTQ+アスリートの参加の歴史をジャーナリストが理解する手引きとなるよう、特にトランスジェンダーのアスリートに関して、正確かつ排除しないインクルーシブな、そして相手に敬意をもった報道が実行されるよう、事実と背景状況を提供しています。

¹ <https://www.outsports.com/olympics/2021/7/12/22565574/tokyo-summer-olympics-lgbtq-gay-athletes-list>

基礎用語

LGBTQ+(エル・ジー・ビー・ティー・キュー・プラス)

LGBTQ+(エル・ジー・ビー・ティー・キュー・プラス)とは、レズビアン(Lesbian)、ゲイ(Gay)、バイセクシュアル(Bisexual)、トランスジェンダー(Transgender)、クィア(Queer)の英語の頭文字をとった略語です。最後のQについては、クエスチョニング(Questioning)とする場合もあります。LGBTQ+という頭字語は、多様な性的指向や恋愛的指向、性自認を持つ人々のコミュニティを表しており、記号「+」が使用される場合、パンセクシュアル(Pansexual)、インターセックス(Intersex)／性分化における様々な違い(Differences of Sex Development: DSD)、ノンバイナリー(Nonbinary)、アセクシュアル(Asexual)など、さらに多くの性的指向や性自認がこのコミュニティに含まれていることを意味します。一人の人間がLGBTQ+のすべてであることはないため、この頭字語は個人ではなくコミュニティを表しています。報道関係者の方は、いくつかの異なる頭字語(LGBT、GLBT、LGBTQIA、LGBTIなど)を見聞きされることがあるかもしれませんが、これは文化的な違いや言葉の進化を反映しています。特に、頭字語にインターセックス(Intersex)の人々等のコミュニティの「I」が含まれている場合、含まれる人の範囲が広がり、様々な身体構造における性的特徴を生まれながらに持つ人々が含まれます。

SOGIE(ソジー)

SOGIE(ソジー)とは、性的指向(Sexual Orientation)、性自認(Gender Identity)、性別表現(Gender Expression)の英語の頭文字をとった略語であり、これらのトピックに関連する幅広い問題や政策について、また特にLGBTQ+に関連する問題について取り上げる上で、国際的に使用されている言葉です。SOGIESC(ソジースク)が用語として使われることもあります。これは、「身体構造における性的特徴(Sex Characteristics)」を追加することで、インターセックス(Intersex)の方々に影響を与える人権問題に対して特別な注意を払うためです。

性的指向(Sexual Orientation)

性的指向(Sexual Orientation)とは、個人が同性あるいはその他の性自認を持つ相手に対して持続的に感じる身体的魅力を示す用語で、例としてレズビアンやゲイ、バイセクシュアル、異性愛者(ストレート)などの指向があげられます。「性的嗜好(Sexual Preference)」という言葉には、ゲイやレズビアン、バイセクシュアルは、自ら選んでそうなったのであり、そのような嗜好は「矯正可能」であるというニュアンスが含まれ、不快感を与えるため、使わないようにしてください。自分の性的指向を知ること、特定の性的な体験をしている必要はありません。また性的な経験そのものがなくても、自身の性的指向を知ることが可能です。

恋愛指向(Romantic Orientation)

恋愛指向(Romantic Orientation)とは、個人が同性あるいはその他の性自認を持つ相手に対して持続的に抱く恋愛的、感情的関心を示す用語で、例としてホモロマンティック、バイロマンティック、アロマンティック、ヘテロロマンティックなどの指向があげられます。

性自認 (Gender Identity)

性自認 (Gender Identity) とは、個人が自分のジェンダーについて内面深くに抱いている感覚のことです。トランスジェンダーの人は、自分の性自認が出生時に割り当てられた性別と一致していません。シスジェンダー (Cisgender) もしくは非トランスジェンダーの人は、自分の性自認が出生時に割り当てられた性別と一致しています。

性別表現 (Gender Expression)

性別表現 (Gender Expression) とは、人の名前、三人称、服装、髪型、行動、声、身体的特徴をはじめとした、外見上の性別のことを表します。社会的には、こうしたことを手がかりとして、男性的もしくは女性的であると認識されますが、何が男性的で何が女性的かということは時代とともに変化し、また文化的にも異なります。トランスジェンダーの人は、出生時に割り当てられた性別ではなく、自らが自認するジェンダーに基づいた性表現を追求する傾向にあります。

身体構造における性的特徴 (Sex Characteristics)

身体構造における性的特徴 (Sex Characteristics) とは、性に関する身体的な特徴で、染色体、性器、性腺、ホルモン、その他の生殖に関すること、そして、思春期からの第二性徴が含まれます。

インターセックス (Intersex) / 性分化における様々な違い (Differences of Sex Development: DSD)

インターセックス (Intersex) とは、女性または男性の身体の医学的および社会的「規範」に合わない身体構造における性的特徴を一つ以上先天的に持つ人々の総称です。そして、そのために、危険や偏見や差別を経験するリスクが上がります。インターセックス (Intersex) の人々は、様々なインターセックスの特徴とその他の特徴を持つ多様なグループです。インターセックスの特徴を持つ人々は、様々な用語を使用しています。例えば、インターセックスである、インターセックスの特徴や状態を有している、または特定の特徴の名称を使うなどです。インターセックスの特徴を有することは、比較的よく起こることであり、最大1.7%の人が何らかのインターセックスの特徴を持って生まれてきます²。医学界ではしばしば性分化疾患 (Disorders of Sex Development) と称されますが、インターセックスコミュニティからは病理的で、スティグマを引き起こすものであるため使用を避けるべきだと広く認識されています。一方で、日本では「両性具有」「ふたなり」「半陰陽」などの蔑称的な言葉がインターセックスの訳語として使用されてきた背景もあり、インターセックスよりDSD (Differences of Sex Development: 性分化における様々な違い) が使用されることがあります。しかしながら、その用語の扱い方自体は病理的でスティグマを引き起こす、性分化疾患 (Disorders of Sex Development) としばしば見分けがつかないという難しさもあります。

アイデンティティの交差と重複

これらの人々のアイデンティティは重なり合うことがあり、尊重されるべき異なる経験を持っています。同性に惹かれるトランスジェンダーの人々もいれば、同性に惹かれ、インターセックスの特徴を有する人々、あるいはトランスジェンダーの人でインターセックスの特徴を有している人々もいます。インターセックスの女性や男性が、シスジェンダーであることも、ヘテロセクシュアルであることもあります。

² <https://interactadvocates.org/faq/>

トランスジェンダーおよびノンバイナリー

トランスジェンダー(Transgender)

トランスジェンダー(Transgender)とは、出生時に割り当てられた性別とは異なる性自認を持つ人々の総称です。トランスジェンダーという総称で呼ばれる人々は、「トランスジェンダー」という言葉以外にも、多種多様な言葉で自分のことを表現することがあります。その人が好んで使用している言葉を使いましょう。トランスジェンダーの人々の中には、医師から処方されたホルモン剤で、自分の体を自認する性別に近づけようとする人も多くいます。また身分証に記載される名前や性別を変えたり、手術を受けたりする人もいます。一方、すべてのトランスジェンダーの人がこうした措置を講じることができる、もしくは講じる意思があるわけではなく、またトランスジェンダーとしてのアイデンティティは、外見や医療行為に左右されるものではありません。報道で取り上げる際には、最初は省略せず「トランスジェンダー」と記載するのが最善ですが、その後は「トランス」と省略することも可能です。

国立社会保障・人口問題研究所が実施した「大阪市民の働き方と暮らしの多様性と共生にかんするアンケート」の調査報告を参照すると^(※)、日本では、出生時に男性と割り当てられた方の中で0.7%の方が、「女性を自認している」「違和感がある」と回答しています。また、出生時に女性と割り当てられた方の中で0.8%の方が、「男性を自認している」「違和感がある」と回答しています。

ノンバイナリー(Nonbinary)

ノンバイナリー(Nonbinary)とは、自分の性自認や性別表現が男性および女性のカテゴリーから外れていると感じる人々が使用する言葉です。ノンバイナリーの中には、自分が男性と女性の間どこか中間に位置すると考える人もいれば、男性や女性といった言葉で定義することはできないと考える人もいます。ノンバイナリーという言葉は、インターセックスやトランスジェンダーの同義語ではなく、ノンバイナリーを自認する人についてのみ使用すべき言葉です。米国のシンクタンク「ウィリアムズ・インスティテュート(Williams Institute)」によると、米国でノンバイナリーを自認する人は、120万人に上ります³。また世界には、日本で使われる「Xジェンダー」のように、男性と女性という二元的(バイナリー)なカテゴリーの中間、もしくはそのカテゴリーの外に位置する人々を表す言葉が他にもあります。

シスジェンダー(Cisgender)

シスジェンダー(Cisgender)とは、性自認が出生時に割り当てられた性別と一致する個人を表す言葉です。「シス(Cis-)」は、「同じ側にいる」という意味のラテン語の接頭辞で、「トランス(trans-)」の対義語です。シスジェンダーの人をよりわかりやすく表現するならば、非トランスジェンダーと言うこともできます。

³ <https://williamsinstitute.law.ucla.edu/publications/nonbinary-lgbtq-adults-us/>

※出典：釜野さおり・石田仁・岩本健良・小山泰代・千年よしみ・平森大規・藤井ひろみ・布施香奈・山内昌和・吉仲崇 2019.「大阪市民の働き方と暮らしの多様性と共生にかんするアンケート報告書(単純集計結果)」JSPS 科研費 16H03709「性的指向と性自認の人口学—日本における研究基礎の構築」・「働き方と暮らしの多様性と共生」研究チーム(代表 釜野さおり) 編 国立社会保障・人口問題研究所内

トランスジェンダーアスリートの報道に関するベスト・プラクティス

トランスジェンダーの人々はこれまで何年も（定められたルールのもと）公平にスポーツに参加してきました。忘れてはならないのは、あらゆるレベルのトランスジェンダー選手を含むすべての人が、平等にスポーツにアクセスでき、参加する権利があるということです。

人々はスポーツやアスリートが、チームワークや、敬意、高潔、逆境を克服する力、誰も排除しない（インクルージョン）、そして平等といった、私たちの文化において特に大切とされる価値観を示すことを期待します。スポーツがトランスジェンダーの人々を受け入れることは、ただスポーツをしたり参加したりできるというだけでなく、トランスジェンダーの人々に対する根本的な平等を全体として表現するものです。

あなたはジャーナリストとして、アスリートであり、かつチームや社会に貢献するメンバーであるトランスジェンダーの人々について、世の中に情報を与えるうえで極めて重要な役割を担っています。

次の重要なガイドラインを参照してください。

必ずトランスジェンダーの当事者が選んだ名前を使用する

トランスジェンダーの人々の多くは、氏名変更が裁判所によって法的に認められていません。費用が工面できない人や、氏名を変更できる年齢に達していない人、または法律上の手続きが難しい場合もあります。

過去の出来事について言及する場合にも、現在の氏名とジェンダーを必ず使用する

トランスまたはノンバイナリーのアスリートに以前の名前で功績がある場合、過去の出来事について言及する際は、たとえそれが性別により分類されるイベントであっても現在の氏名を使用してください。例：「エリオット・ページは受賞歴のある俳優です。彼は2007年の映画『ジュノ』で、主演女優賞にノミネートされました。」

トランスジェンダーまたはノンバイナリーの人の正しい三人称を必ず使う

「彼」「彼女」などの三人称は日常会話の中で人に性差をつけるものであり、誤った三人称を使うこと（以前の

三人称を使用することを含む）は、その人の性自認を軽視することになります。その人の三人称がわからなければ、どの三人称を使えばよいか尋ねてよいのです。取材対象の方にどの三人称を使うのか聞くことができない場合、三人称を使用せずに報道するか、英語では単数のtheyを使用しましょう。多くのメディア機関が単数のthey/themを三人称に含めるよう報道ガイドラインを改訂しています。

医学的な問題に集中しないようにする

トランスジェンダーの人に過去に行った、あるいは行っていない生殖器等の手術について質問をすることは、トランスジェンダーでない人にその質問をするのと同じように、不適切です。トランスジェンダーであることを精神障害とみなしてはなりません。世界保健機構（World Health Organization: WHO）、米国精神医学会も米国心理学会も、トランスジェンダーを「精神障害」ととらえていません。

回避すべき表現

- ・「**生物学的な女性／生物学的な男性**」。生物学的な性別は複雑で、二つに分けられるものではありません。ホルモン、染色体、解剖学的な性徴は人それぞれ違います。ほとんどのトランスジェンダーのアスリートや一部のインターセックスのアスリートは、ホルモン値などを測定する厳しいテスト要件に合格しています。そのアスリートを「生物学的な女性」などと表現することは、単純化されており、不正確です。
- ・「**男性に生まれた／女性に生まれた**」。性自認とともに生まれる人はいません。誰もが赤ん坊として生まれ、視認できる身体的構造に基づいて医師や家族によって性別が与えられます。その身体的構造は、時間をかけて発達する性自認と必ずしも一致するとは限りません。
- ・「**トランスジェンダー化／トランスジェンダー主義**」。トランスは人を描写するために使われる形容詞です。動詞ではありません。代わりに、トランスジェンダーの人々、トランスジェンダーの人、トランスジェンダーのコミュニティを使用してください。日本のトランスジェンダーコミュニティでは、トランジションすることを「トランスする」と動詞的用法で表現する場合がありますが、「トランジションする」と省略せずに表現することが好ましいです。
- ・「**自称する**」。トランスジェンダーの女性は女性であり、ノンバイナリーの人々はノンバイナリーです。「ジョー・バイデンは男性だと自称する」と書かないのであれば、「ジェイコブはノンバイナリーだと自称する」とも書くべきではありません。
- ・「**術後の／手術済みの**」。医学的なステップは、トランスジェンダーの人々がトランジションのために取るステップの一部にすぎず、必須の事柄ではありません。トランスジェンダーの人々の中には手術を受ける人もいますし、そうでない人もいます。人の生殖器は他人に関係のないことであり、いかなるスポーツにおいても競技する能力に影響するものではありません。手術手技や性自認に沿った医療措置について立ち入った質問をするのは避けるべきです。
- ・「**男性ホルモン**」。IOCによるガイドラインにおいて、体内で分泌されるホルモンについては、医学的な名称である「テストステロン」が使用されています。報道においても「テストステロン」を使用しましょう。「男性ホルモン」という名称は、トランスジェンダーの女性アスリートの性自認とは異なるジェンダーの印象を強めることとなります。なお、「テストステロン」は「エストロゲン」と同様に、性自認や出生時に割り当てられた性に関わらず、多くの人の体内で分泌されており、本来、「男性ホルモン」「女性ホルモン」という総称は誤解を生みやすいものです。

第4章

トランスジェンダーのアスリートに関するオリンピックの規定

トランスジェンダーのアスリートは、スポーツ界に常に存在してきました。国際オリンピック委員会 (IOC) は、2000年代初頭よりスポーツ界にトランスジェンダーの人々を受け入れることに努めてきました。2003年にIOCが招集した「スポーツにおける性別変更に関するストックホルム合意」では、トランスジェンダーのアスリートに対する新しいガイドラインが作成され⁴、アスリートが性別適合手術を受けること、自らのジェンダーに対する法的承認を示すこと、そして少なくとも2年間はホルモン療法を受けていること、という3つの参加要件が義務付けられました。2004年にIOCは、トランスジェンダーのアスリートが上記のガイドラインを満たしたうえでオリンピック競技に参加することを認めました(とはいえ、誰も参加しませんでした)⁵。

2015年にIOCは新たなガイドライン⁶を採択し、結果として性別適合手術の義務化はなくなり、最新の人権基準やトランスジェンダーの人々の権利を法的に保護する世界的な動向に即

して、ガイドラインを見直す必要を認めました。この2015年のガイドラインにより、トランスジェンダーの男性アスリートは「何ら制限を受けることなく」男性カテゴリーの競技に参加できることが認められましたが、トランスジェンダーの女性アスリートは、最初の競技参加前の少なくとも1年間は、テストステロン値が一定のレベル以下であることを証明することを依然として義務付けられました⁷。このガイドラインは2016年のリオデジャネイロ・オリンピックにおいて導入されましたが、トランスジェンダーであることを公表したアスリートが競技に参加することはありませんでした。

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会では、カミングアウトしたトランスジェンダーのアスリートが初めて自身の自認する性別カテゴリーで競技に参加します。自認する性別カテゴリーで参加資格のあるトランスジェンダーのアスリートは、上記のガイドラインの基準をいずれも満たしています。

⁴ <https://olympics.com/ioc/news/ioc-approves-consensus-with-regard-to-athletes-who-have-changed-sex>

⁵ <https://olympics.com/ioc/news/ioc-approves-consensus-with-regard-to-athletes-who-have-changed-sex>

⁶ http://www.olympic.org/Documents/Commissions_PDFfiles/Medical_commission/2015-11_ioc_consensus_meeting_on_sex_reassignment_and_hyperandrogenism-en.pdf

⁷ http://www.olympic.org/Documents/Commissions_PDFfiles/Medical_commission/2015-11_ioc_consensus_meeting_on_sex_reassignment_and_hyperandrogenism-en.pdf

注目のLGBTQ+アスリートたち

この夏の東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会には、史上最多となる少なくとも163名のLGBTQ+アスリートが参加します（本ガイドライン日本語版発表時の2021年7月19日時点の『アウト・スポーツ』（<https://www.outsports.com/>）の独自調査による人数です）。『アウト・スポーツ』誌によると、カミングアウトしていたLGBTQ+アスリートの参加数は2016年時点で56人、2012年には23人しか把握されていませんでした。スポーツ界が、そして世界が、LGBTQ+の人々にとってより安全でインクルーシブになるにつれて、LGBTQ+アスリートは以前よりも安心して、ありのままの自分でオープンに生きられるようになってきました。今回のオリンピック・パラリンピックに出場する予定（2021年7月19日時点）の注目のアスリートたちを下記に紹介します。ただし、すべてのLGBTQ+アスリートを網羅したリストではないことにご留意ください。

スー・バード（三人称 she/her、米国代表チーム、バスケットボール）はシアトル・ストーム所属のプロバスケットボール選手で、米国女子代表チームのメンバー。2002年のWNBAドラフトでシアトル・ストームに1位指名されたバードは、WNBAの歴史の中でも屈指のプレイヤーとして知られています。彼女はレズビアンであることを公表しており、サッカー選手であるミーガン・ラビノーと婚約しています。また、バードはLGBTQ+アスリート支援団体であるアスリート・アライのアンバサダーでもあります⁸。

トム・ボスワース（三人称 he/him、英国代表チーム、競歩）は6つの英国記録を保持し、数々の世界大会や国内大会でメダルを獲得したイギリス競歩界のチャンピオンです。2015年にゲイであることをカミングアウトしたボスワースは、LGBTQ+の熱心な擁護者であり、2016年のリオ・オリンピックの際に、現在の夫であるハリーにプロポーズしたことで話題になりました⁹。

イザドラ・セルーロ（三人称 she/her、ブラジル代表チーム、7人制ラグビー）は米国系ブラジル人の7人制ラグビーブラジル代表選手。2015年のパンアメリカン競技会ではチームの一員として銅メダルを獲得しました¹⁰。2016年のリオ・オリンピックに参加した際には、試合後のデオドロ競技場のグラウンド上でパートナーの女性にプロポーズされ、のちに彼女と結婚しました¹¹。セルーロはアスリート・アライのアンバサダーも務めています。

ケンドール・チェイス（三人称 she/her、米国代表チーム、ボート）は、U23世界チャンピオンに5回輝き、世界ジュニアボート選手権でも銀メダルを獲得した経験を誇ります。

LGBTQ+アライを自認するチェイスは、自身のボート競技チームのプロフィールにこう綴っています。「ボート競技において、アスリートやLGBTQ+の若者たちが安心してできる場所を見いだす手助けをしたい」¹²

トム・デイリー（三人称 he/him、英国代表チーム、飛込）は世界大会、ヨーロッパ大会、コモンウェルス大会など数々のタイトルを獲得した飛込選手で、2012年ロンドン大会、2016年リオ大会では銅メダルを獲得しました¹³。自らをクィアと自認するデイリーは、2013年にYouTube上でカミングアウトしました。2017年には脚本家であるダスティン・ランス・ブラックと結婚し、3歳の息子、ロバートさんを育てています^{14,15}。



トム・デイリー



米国代表ボート競技チーム。
左から：レジーナ・サーモンズ、メーガン・オレアリー、ジア・ドゥーナン、ケンドール・チェイス、エレン・トメック

⁸ <https://www.teamusa.org/usa-basketball/athletes/Sue-Bird>

⁹ <https://www.theguardian.com/sport/2016/aug/16/olympic-marriage-proposals-tom-bosworth-question-boyfriend>

¹⁰ "Isadora CERULLO". Toronto2015.org. 2015 Pan American Games. Archived from the original on 2017-05-10. Retrieved 2021-07-1.

¹¹ "Rio 2016: Brazilian rugby player accepts surprise on-field marriage proposal after 7s final". ABC News. 9 August 2016. Archived from the original on 2016-08-12. Retrieved 9 August 2016.

¹² <https://usrowing.org/sports/olympic/roster/kendall-chase/344>

¹³ <https://olympics.com/en/athletes/thomas-daley>

¹⁴ <https://www.bbc.co.uk/news/uk-england-devon-25183041>

¹⁵ <https://www.bbc.co.uk/news/uk-england-devon-39836555>

ジア・ドゥーナン（三人称 she/her、米国代表チーム、ボート）は、2019年世界ボート選手権のエイトで3位入賞し、2019年のボートワールドカップでも、2度2位入賞を果たした実力者。U23世界選手権の金メダリストでもあります¹⁶。

エデニャ・ガルシア（三人称 she/her、ブラジル代表チーム、競泳）はブラジル出身のpara競泳選手で、レズビアンであることを公表しています¹⁷。背泳ぎの選手としてこれまで2004年アテネ大会銀メダル、2008年北京大会銅メダル、2012年ロンドン大会銀メダルの3つのパラリンピックメダルを獲得しました^{18,19}。

ブリトニー・グリナー（三人称 she/her、米国代表チーム、バスケットボール）は、フェニックス・マーキュリー所属のWNBA選手で、米国女子代表バスケットボールチームのメンバーです。2013年に『スポーツ・イラストレイテッド』誌上でレズビアンであることをカミングアウトしました。グリナーはチームメートのスー・バードとともに、オリンピック代表メンバーの中でオリンピックの金メダル、FIBAワールドカップの金メダル、WNBAのタイトルとNCAA（米大学体育協会）トーナメント優勝を果たした経験のある11人のうちの一人です²⁰。



ブリトニー・グリナー

ローレル・ハバード（三人称 she/her、ニュージーランド代表チーム、重量挙げ）は、ニュージーランドの重量挙げ選手。6月21日の正式発表により、トランスジェンダーであると公表しているアスリートの中で自身の自認する性別カテゴリーでのオリンピック出場資格を取得した史上初の選手となりました²¹。ハバードは、今回のオリンピックに参加するニュージーランド重量挙げ代表選手5人のチームのうちの一人です²²。彼女のランキングは、オリンピックでの彼女の階級（87キロ級）の中で4位。そして43歳での出場は、史上最高齢のオリンピック出場重量挙げ選手となります²³。

ロビン・ラブ（三人称 she/her、英国代表チーム、車椅子バスケットボール）は、スコットランド人のパラリンピック・バスケットボール選手。2015年の大阪カップで銀メダルを獲得し、日本で国際デビューを果たしました。また彼女のチームは、2016年リオデジャネイロのパラリンピックでも、4位入賞を果たしています。ラブはアスリート・アライのアンバサダーも務めています²⁴。



ロビン・ラブ

メーガン・オリアリー（三人称 she/her、米国代表チーム、ボート）は、2016年のオリンピック出場選手、2017年の世界ボート選手権の銀メダリスト、そしてボートの米国代表チームの一員に5度選ばれており、今回は彼女にとって2度目のオリンピック出場となります。試合に出ていない間は、オリアリーは人々を鼓舞するプロの演説家として活動しており、マーケティング担当の重役でもあります²⁵。

¹⁶ <https://www.usrowing.photos/2021-Olympic-Team-Headshots/i-pXRNWGF>

¹⁷ http://news.bbc.co.uk/onthisday/hi/dates/stories/february/11/newsid_4504000/4504532.stm

¹⁸ <https://www.theguardian.com/sport/2008/jun/29/olympicgames>

¹⁹ <https://www.smithsonianmag.com/history/brief-history-openly-gay-olympians-180968125/>

²⁰ <https://www.outsports.com/2016/9/6/12731156/paralympics-lgbt-gay-athletes-out-rio>

²¹ <https://www.glaad.org/blog/take-action-use-principle-6-graphics-support-global-equality-olympics>

²² <https://people.com/sports/winter-olympics-2018-adam-rippon-gus-kenworthy-competing-openly-gay-athletes/>

²³ <https://www.reuters.com/lifestyle/sports/new-zealand-names-transgender-athlete-hubbard-womens-tokyo-olympics-2021-06-20/>

²⁴ <https://www.pinknews.co.uk/2021/06/18/trans-bmx-chelsea-wolfe-tokyo-olympics/>

²⁵ <https://meghanoleary.net/>

クイン(三人称 they/them、カナダ代表チーム、サッカー)は、米国のナショナル・ウィメンズ・サッカーリーグ(NWSL)のOLレインと、カナダの女子サッカー代表チームで、ミッドフィールダーを務めています²⁶。クインは2016年の夏季オリンピックにカナダ代表チームのメンバーとして出場し、銅メダルを獲得。2020年9月に、トランスジェンダーであるとカミングアウトしました。2021年6月23日には、東京オリンピックのカナダ代表チームのメンバーに選抜されたと発表されました^{27,28}。クインはアスリート・アライのアンバサダーを務めています。

ドウグラス・ソウザ(三人称 he/him、ブラジル代表チーム、バレーボール)は、ブラジルの男子バレーボールチームのアウトサイドヒッター。ブラジルは現在世界ランキング1位のチームです。ソウザのチームは2016年のリオ・オリンピックで金メダルを獲得したのに加え、その他いくつかの世界選手権でも勝利を収めてきました。ソウザはしばしば、カミングアウトしたLGBTQ+アスリートであることの重要性について、ブラジルのマスコミに語っています²⁹。

ミーガン・ラピノー(三人称 she/her、米国代表チーム、サッカー)は、ワールドカップで2度の優勝経験を持つ、米国女子代表サッカーチーム(USWNT)の共同キャプテン。ラピノーはUSWNTを2019年の女子ワールドカップ優勝へと導いた際に、同大会で最も大きなゴールをいくつか決め、さらに二つの最高賞——得点王としてゴールデンブーツ賞、最優秀選手としてゴールデンボール賞——も受賞しました。ラピノーはレズビアンであることを公表しており、バスケットボール選手のスー・バードと婚約しています。また、LGBTQ+の平等の提唱者でもあります。ラピノーはアスリート・アライのアンバサダーとしても活動しています³⁰。

ジェシカ・トネス(三人称 she/her、米国代表チーム、ボート)は、ワシントン大学在籍中に、全米大学スポーツ協会(NCAA)の大会で優勝。2017年のU23世界選手権では、女子エイトで銀メダルを獲得しました³¹。

エレン・トメック(三人称 she/her、米国代表チーム、ボート)は、ボート競技において数々のメダルを獲得しているチャンピオン選手。2008年と2016年のオリンピックにおいて(ボート競技の)ダブルスカルに出場しました。トメックはこれまで世界ボート選手権とボートワールドカップで複数のメダルを獲得しているほか、多数の国内試合でも勝利を収めています³²。

チェルシー・ウルフ(三人称 she/her、米国代表チーム、BMXフリースタイル補欠)は、BMXフリースタイルの米国代表チームの選手。彼女は、トランスジェンダーを公表している女性として米国のオリンピック代表チームのメンバーに選出された初めての選手であり、今回初めてオリンピックの正式種目となったBMX女子エリートの米国代表チームの補欠です^{33,34}。ウルフはアスリート・アライのアンバサダーも務めています。



ミーガン・ラピノー

ジャック・ウーリー(三人称 he/him、アイルランド代表チーム、テコンドー)は、オリンピックレベルでテコンドーの試合に出場することになる初のアイルランド人アスリート。今回が彼にとって初めてのオリンピック出場になりますが、これまでにオーストラリア、トルコ、米国で開かれた世界選手権やヨーロッパ選手権でメダルを獲得しています。ウーリーは、バイセクシュアルであることをメディアでカミングアウトしましたが、それ以降、試合で彼と握手することを拒む相手選手もいると語っています³⁵。

²⁶ <https://olympic.ca/team-canada/quinn/>

²⁷ McElwee, Molly (September 9, 2020). "Canada international Quinn comes out as transgender". The Telegraph. Retrieved September 23, 2020.

²⁸ <https://olympic.ca/2021/06/23/team-canada-soccer-squad-set-for-tokyo-2020/>

²⁹ <https://www.olimpiadatododia.com.br/orgulho-lgbtqia/245986-caso-lilico-ajudou-douglas-souza-a-vencer-e-inspirar-jovens-lgbtqj/>

³⁰ <http://meganrapinoe.com/>

³¹ <https://www.usrowing.photos/2021-Olympic-Team-Headshots/i-WcCkcsP>

³² <https://www.usrowing.photos/2021-Olympic-Team-Headshots/i-b82vq2W>

³³ <https://www.dailymail.co.uk/news/article-9701947/BMX-rider-Chelsea-Wolfe-Team-USAs-transgender-Olympian.html>

³⁴ <https://usacycling.org/athlete/chelsea-wolfe>

³⁵ <https://www.pinknews.co.uk/2020/01/24/bisexual-olympics-jack-woolley-ireland-taekwondo-coming-out-homophobia-biphobia/>

オリンピックにおけるLGBTQ+アスリートの歴史

LGBTQ+アスリートの中には、オリンピック、パラリンピックに参加した時点ではカミングアウトしていなかった選手も多くいますが、大会の歴史において、極めて重要な役割を果たしてきました。

1976年のオリンピックで、イギリスのフィギュアスケート選手ジョン・カリーは、金メダル獲得直後に、メディアによってゲイであることを暴露されました。カリーは噂が真実であると答え、そのことによって、正式にゲイであることをカミングアウトした最初のオリンピック選手となりました。カリーは1994年にAIDSの合併症で亡くなりましたが、死の数年前から自分の病気について包み隠さずに語っていました³⁶。

カミングアウトするオリンピック選手が現れる以前には、多くのLGBTQ+アスリートがそれを隠したまま競技に参加していました。グレゴリー・ローガニスやジョニー・ウィアーのように、オリンピック競技が終わるのを待ってから、公表を決めたアスリートもいました。しかしながらそのような選択肢が与えられなかった人々もいます。最初のゲイのオリンピック選手として知られるドイツのオットー・ペルツァーは、1928年、1932年の大会に陸上競技選手として参加した後、1934年に同性愛の罪で逮捕され、その結果トレーニングができず、1936年のベルリン大会への出場資格を得られませんでした。ペルツァーは後にナチスの強制収容所に送られました³⁷。

1982年 オリンピック十種競技のトム・ワデルがゲイゲームズを設立しました。ワデルは1968年のメキシコシティオリンピックの十種競技の選手で、後にオリンピックをモデルにゲイスポーツイベントを始めようと思いを立ちました。当初は、ゲイ・オリンピックという名称で開催されましたが、開幕のわずか3週間前に提起された訴訟により、主催者は名称をゲイゲームズに変更することを余儀なくされました。それ以降、ゲイゲームズは継続して開催されており、次の大会は2022年の香港大会が予定されています。

1988年 馬術競技者であるロバート・ドーバーは自身がゲイであると公表し、2度目の参加となる1988年大会において、カミングアウトしたゲイとしてオリンピックに参加した最初のアスリートとなりました³⁸。

2012年 少なくとも2人のカミングアウトしたLGBTQ+アスリートがパラリンピックに参加したことがわかっています。イギリスのクレア・ハーベイ（バレーボール）とリー・ピアソン（馬術）です。2016年のリオ・パラリンピックには、少なくとも12人のカミングアウトしたLGBTQ+アスリートが参加しました³⁹。

2014年 アスリート・アライ（スポーツ界におけるLGBTQ+サポート団体）、グラード（メディアにおけるLGBTQ+サポート団体）、そしてオール・アウト（愛と平等を提唱するグローバル運動）は提携して、ソチ冬季オリンピックの大会期間中にプリンシパル6キャンペーンを展開し、オリンピック憲章の反差別に関する第6原則の中に⁴⁰、護られる項目として性的指向が含まれるよう働きかけ、成功を収めました。

2018年 アダム・リップンとガス・ケンワージーは、ゲイであるとカミングアウトして冬季オリンピックに参加した最初の米国人となりました⁴¹。

2021年 ニュージーランドの重量挙げ選手であるローレル・ハバードは、カミングアウトしたトランスジェンダーアスリートとしてオリンピック出場資格を得た⁴²最初の競技者となり、カナダ人のサッカー選手クインもこれに続きました。BMXのフリースタイル競技者である米国人のチェルシー・ウルフは補欠としてチームUSAへの加入が認められ⁴³、オリンピックにおける米国代表チーム初のトランスジェンダーアスリートとなりました（しかし、米国代表チーム入りを果たした最初のトランスジェンダーアスリートはクリス・モジエです。トライアスロン殿堂入りで、デュアスロンの全米代表でもあるモジエは、米国代表チームのメンバーに6度選ばれています）。

³⁶ http://news.bbc.co.uk/onthisday/hi/dates/stories/february/11/newsid_4504000/4504532.stm

³⁷ <https://www.theguardian.com/sport/2008/jun/29/olympicgames>

³⁸ <https://www.smithsonianmag.com/history/brief-history-openly-gay-olympians-180968125/>

³⁹ <https://www.outsports.com/2016/9/6/12731156/paralympics-lgbt-gay-athletes-out-rio>

⁴⁰ <https://www.glaad.org/blog/take-action-use-principle-6-graphics-support-global-equality-olympics>

⁴¹ <https://people.com/sports/winter-olympics-2018-adam-rippon-gus-kenworthy-competing-openly-gay-athletes/>

⁴² <https://www.reuters.com/lifestyle/sports/new-zealand-names-transgender-athlete-hubbard-womens-tokyo-olympics-2021-06-20/>

⁴³ <https://www.pinknews.co.uk/2021/06/18/trans-bmx-chelsea-wolfe-tokyo-olympics/>

スポーツにおけるSOGIESC（ソジースク）差別とアンチトランスジェンダーのヘイトの増加

スポーツは昔からずっと、世界で最も優れた社会化メカニズムの一つとされてきました。一つの言語に縛られることなく様々な価値観を伝えることができ、スポーツで頂点を極めた競技者は、世界的に有名になり、尊敬を集めています。スポーツをすることはまた、心理的にも肉体的にも健康を保つ上で大いに効果的です。トレバー・プロジェクト(LGBTQ+の若者向けの自殺防止および危機介入組織)による調査では、LGBTQ+の若者でスポーツをしている人の場合、していない人

よりも成績が良く、うつ病やアルコール依存に悩む人の割合が低いことが示されています⁴⁴。それにもかかわらず、LGBTQ+の人々は、今もなお組織的にスポーツから排除されています。ヒューマン・ライツ・キャンペーン(LGBTQ+の平等を擁護する人権団体)の研究によると、LGBTQ+の若者は、同世代の仲間と比べて2倍もスポーツをやめる可能性が高く、また8割以上はコーチに対して自分の性的指向や性自認について打ち明けていないと言います⁴⁵。

また、調査「アウト・オン・ザ・フィールド」から、回答者の

84%

がスポーツの場においてホモフォビアを目撃したり経験したりしていることがわかりました⁴⁶。

スポーツにおけるLGBTQ+に対する差別に立ち向かう上で、最も強力な介入手段の一つは、差別的な「ロッカールームのやりとり」の与える影響の大きさと、誰も排除しないインクルーシブな環境を培う重要性について教育することです。

トレバー・プロジェクトによると、LGBTQ+の若者にとって、支えになってくれるコーチの存在は、自殺の危険を

40%

も減らす命綱になり得ることがわかっています。

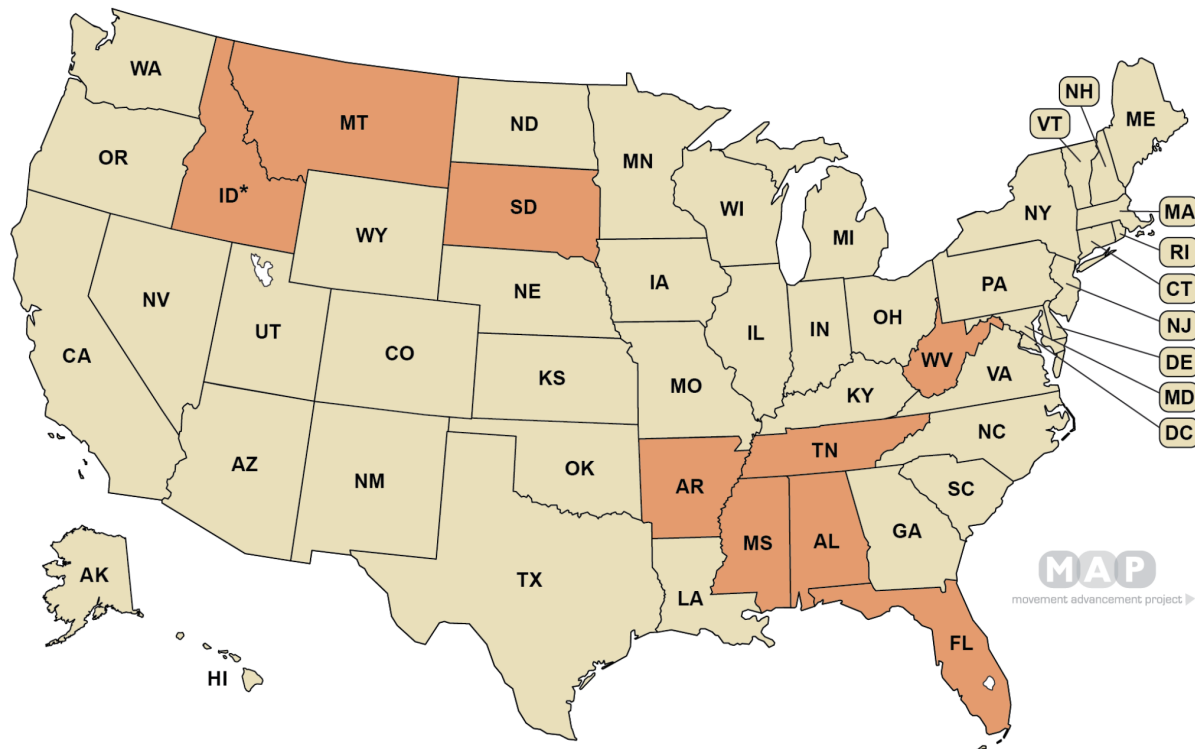
今回のオリンピック・パラリンピック競技大会は、トランスジェンダーであることを公にしている選手たちが私たちの目で競う、史上初めての記念すべき大会です。同時にまた、法律の制定に関してはLGBTQ+社会にとって米国史上最悪の年に重なっており、全体として337本にのぼる反LGBTQ+法案のうち、トランスジェンダーの若者がスポーツに参加するのを禁止しようとする法案が75本も含まれていました。米国の9つの州、すなわちアイダホ州、フロリダ州、サウスダコタ州、ミシシッピ州、アーカンソー州、テネシー州、ウェストバージニア州、モンタナ州、およびアラバマ州で、そのような禁止法案が制定されました。

⁴⁴ “Research Brief: The Well-Being of LGBTQ Youth Athletes.” The Trevor Project. 31 August 2020.

⁴⁵ “Play to Win: Improving the Lives of LGBTQ Youth in Sports.” Human Rights Campaign. June 2018.

⁴⁶ Dennison E, Kitchen A. (2015). Out on the Fields: The First International Study on Homophobia in Sport. Nielsen, Bingham Cup Sydney 2014, Australian Sports Commission, Federation of Gay Games. <http://www.outonthefields.com/media/#United%20States>

トランスジェンダーの子どもが競技会に出場することを禁ずる法律を持つ州



Movement Advancement Project. "Equality Maps: Bans on Transgender Youth Participation in Sports." https://www.lgbtmap.org/equality-maps/sports_participation_bans Accessed 07/15/2021.

トランスジェンダーのスポーツ選手が直面する性別によるこのような差別は、必然的にシスジェンダーのスポーツ選手、とりわけ黒人女性や白人以外の女性や女兒にも影響を及ぼします。ナミビアの女子陸上競技の一流選手であるクリスティン・エムボマ選手とベアトリス・マシリング選手は、生まれつきテストステロン値が高いという理由でこの7月の東京2020大会で400メートル走への出場を差し止められました。2人のレースタイムがあまりに速いことに疑念が生じたとして、両選手に対し医学的検査を行うように世界陸連が要請したのです⁴⁷。ナミビアの国内オリンピック委員会は、生まれつきテストステロン値が基準を超えていることに両選手とも気付いていなかったという声明を出しました⁴⁸。6月には南アフリカの金メダリストであるキャスター・セメンヤ選手もやはり生まれつきのテストステロン値を理由に出場資格を得られませんでした。セメンヤ選手はホルモン値を抑制するための薬の服用を拒んで、彼女が差別的だと指摘する世界陸連の規定に異議を唱え、欧州人権裁判所において2つの訴訟を起こしています⁴⁹。

このような女性たちはすべて、トランスジェンダーのスポーツ選手にも強い衝撃を与えているホルモン値に関する規制によって、大きな影響を受けています。これは、シスジェンダーであるかトランスジェンダーであるかに関わらず、いかに女性スポーツ選手の身体がことさらに精査され、規制されているのかという度合いを示しています。それとは対照的に、優れた男性スポーツ選手の中には、競合選手との身体的な違いを称賛されている選手もいます。オリンピック水泳競技の金メダリストであるマイケル・フェルプス選手は、そのきわめて柔らかい関節や類まれな指極の長さ、それに他のスポーツ選手に比べて彼の身体でつくられる乳酸値がかなり低いという点を引き合いに出されてきました⁵⁰。

スポーツにおけるトランスジェンダー当事者に対する差別は、幼稚園から高校3年生までの若いシスジェンダーの子どもたちにまでも大きな影響を与える場合があります。2017年には、8歳の選手が「男の子のようにみえる」ことを咎められ、そのためにネブラスカ州のユースサッカーチーム全員がトーナメントへの出場資格を取り消されました⁵¹。

⁴⁷ <https://www.cbc.ca/sports/olympics/summer/trackandfield/namibia-teenagers-out-of-olympic-400-over-testosterone-level-1.6087993>

⁴⁸ <https://www.si.com/olympics/2021/07/02/namibia-sprinters-banned-olympic-events-elevated-testosterone>

⁴⁹ https://www.espn.com/olympics/trackandfield/story/_/id/31739867/caster-semenya-fails-reach-olympic-qualifying-5000-meters-race-belgium

⁵⁰ https://www.washingtonpost.com/lifestyle/style/we-celebrated-michael-phelps-genetic-differences-why-punish-caster-semenya-for-hers/2019/05/02/93d08c8c-6c2b-11e9-be3a-33217240a539_story.html

⁵¹ <https://www.si.com/soccer/2017/06/05/nebraska-soccer-tournament-mili-herandez-banned-looks-boy>

オリンピック大会における人種差別

スポーツ競技における人種間の平等は、長年にわたり求められてきました。今年、国際競技団体や各国の競技団体は、黒人アスリート、とりわけ黒人女性のアスリートに対する検査および制裁措置について検討することを、改めて求められています。有色人種のアスリートが直面する課題の多くは、植民地主義や、LGBTQ+アスリートの平等を求める取り組みと関連しています。

今年の7月上旬、米国の陸上競技のスター選手であるシャカリ・リチャードソンは、大麻の陽性反応が出たために出場停止処分を受けました。リチャードソン選手が大麻を使用した米国の州では、大麻使用が合法であったにもかかわらずです。

このほか、オリンピック開催前に国際連盟が適用した方針の結果、生まれつきのテストステロン値が女子選手として競技に参加するには「高すぎる」と判断された黒人の女性選手が特定の競技種目から除外されたり、黒人の水泳選手のみが使用する水泳帽の使用が禁止されたりしています。また最近では、LGBTQ+のプライドを象徴する虹色の旗を掲げる行為や、スポーツの試合前の国歌斉唱時に膝をつく行為、表彰式で拳を高く上げ黒人に対する差別に抗議する行為など、アスリートが平和的な抗議活動に参加したり、政治的な問題について発言したりする権利をめぐる議論が、今回のオリンピック大会をめぐる話題や報道の中心となっています。

人種差別の撤廃に取り組む米国の団体「カラー・オブ・チェンジ(Color of Change)」は、この問題についての啓発活動を牽引。オリンピックにおける人種差別や植民地主義といった問題は、日常のあらゆる場面において正義と平等を求め、闘い続ける世界中の黒人アスリートたち——LGBTQ+の有色人種も含まれます——の、より大きな困難を象徴していると指摘しています。

アンチLGBTQ+活動家およびメディアの誤情報

米国では、数多くのアンチLGBTQ+活動家グループが長年にわたりLGBTQ+の平等を求める活動に対して攻撃を重ね、近年はトランスジェンダーのコミュニティ、特にトランスの若者を標的とした攻撃に多大な資源を投入しています。これまでこれらの組織は、コミュニティが婚姻の権利を求めるのを妨害し、LGBTQ+からのコンバージョンセラピー^(※)禁止令と戦い、教師が学校でLGBTQ+の人々について語ることを禁止する法律を制定してきました。例えば、2015年から2018年の間、これらの活動家グループはトランスの若者による学校のトイレやロッカールームの使用を妨げようとしてきました。このような戦いはほとんどの場合アンチLGBTQ+グループの敗北に終わっていますが、それでもそれらのグループによるモデル法案の作成、法廷でのLGBTQ+の権利に対する戦い、ソーシャルメディアや右翼メディアを使った誤情報の宣伝は続いています。

※コンバージョンセラピー：LGBTQ+を自認する人に対して、悪魔祓い、認知療法、ショック療法、拷問（虐待）のような様々な手段を「矯正」、「治療」と称して、自らの性的指向や性自認を憎悪し、思考や行動を変えるように仕向けること。実際には、性自認や性的指向は矯正できるものではないため、コンバージョンセラピーを通じて深刻な精神被害をもたらし、自殺する人も多いことがわかっている。

これらのアンチLGBTQ+グループが、特にスポーツを行おうとするトランスジェンダーアスリートを標的としている近年のキャンペーンをよく理解することは、ジャーナリストがアンチ・トランスのポリシーや感情を全体像の中で捉える助けとなり、またアンチ・トランスの扇情的な文句が再生産されるのを避ける助けともなります。過去1年間のスポーツをめぐるトランスフォビアの急増は無から生まれたものではなく、これは絶え間ないキャンペーンの結果です。以下に列記するのは、トランスジェンダーのアスリートによる競技会参加を制限、または禁止しようとする非常に有力なグループのいくつかです。ジャーナリストは、現在の運動がアンチ・トランスジェンダー（そして広義のアンチLGBTQ+）の憎悪の延長であることを理解し、以下の組織の声明や広報担当者の発言を、とりわけ念入りに精査すべきです。

プロミス・トゥ・アメリカズ・チルドレン（アメリカの子どもたちへの約束）

長年存続してきたアンチLGBTQ+活動家グループが連合することにより2021年初頭に発足。プロミス・トゥ・アメリカズ・チルドレンはトランスジェンダーの若者向けの、性自認に沿った医療を認める医療福祉を撲滅し、トランスの若者によるスポーツを禁じ、学校でのトランスの平等を妨害するキャンペーンを行ってきました。州の議員にモデル法を提供し、トランスジェンダーの若者への医療福祉を「危険な医学実験」と呼ぶ立法を推し進めています。

自由防衛同盟

南部貧困法律センターによりヘイトグループと指定されている自由防衛同盟（ADF）は、豊かな資金を持つ巨大な法律事務所です。ADFはトランスジェンダーの女性アスリートを雇用し、アイダホ州とコネチカット州でのトランスアスリートによる競技会参加を禁止する訴訟に加わり、LGBTQ+の権利を求める主要な訴訟のほとんどで反対意見の準備書面を提出することで知られています。

ファミリー・ポリシー・アライアンス（家庭政策同盟）

フォーカス・オン・ザ・ファミリー（家族中心）から派生したファミリー・ポリシー・アライアンスは全米の支部とつながりがあり、近年はトランスジェンダーの権利との戦いを中心的課題の一つに定めています。当グループは#SaveGirlsSports（女子スポーツを救え）と呼ばれるキャンペーンをはじめ、トランスの女性は先天的に、トランスジェンダーの女性より身体的に有利だという誤った主張を行っているほか、米国初のアンチ・トランススポーツ禁止令（アイダホ州）に責任を持つ、とウェブサイト上で誇示しています。



あらゆる大手の米国医療団体は、若者の性自認に沿った医療を認める医療福祉、そしてすべての若者のスポーツ参加を支持しています。

ヘリテージ財団

右翼のシンクタンクで、米国共和党に大きな影響力を持つヘリテージ財団は、アンチ・トランスジェンダー主義であり、ジェンダーを中心的課題の一つとして掲げています。2021年を通し、当グループは、性自認に沿った医療を認める医療福祉は子どもたちに有害であり（あらゆる大手の米国医療団体がそのような医療福祉を支持しているにもかかわらず）、また平等なスポーツ参加は女性に害を及ぼす、という誤情報を含む報告書を数多く出版しました。前副大統領マイク・ペンス氏は過去のアンチLGBTQ+政策で有名であり、現在はヘリテージ財団のフェローとなっています。

フェアプレー・フォー・ウィメン（女性へのフェアプレー）

2017年にトランスジェンダー当事者の平等に対する戦いを明確な目標として発足した、英国を基盤とする団体。フェアプレー・フォー・ウィメンはトランスジェンダーの女性がスポーツ、女子刑務所、女子トイレや更衣室に入ることを制限しようとしています。さらに当グループは、トランスの人々が改名しやすくなるような英国のジェンダー承認法の変更など、より広範な包括的トランス政策に反対して戦っています。

セーブ・ウィメンズ・スポーツ（女子スポーツを守れ）

2019年に発足した米国のグループであるセーブ・ウィメンズ・スポーツは、トランスジェンダーの女性が女性部門でトレーニングし、資格を得て競技することの禁止にほとんど一方的に焦点を当てているという点で、上述のフェアプレー・フォー・ウィメンに似ています。セーブ・ウィメンズ・スポーツの創立者ベス・ステルツァーはファミリー・ポリシー・アライアンスやヘリテージ財団主催のイベントで講演を行っています。

ウィメンズ・スポーツ・ポリシー・ワーキング・グループ（女性スポーツ政策ワーキング・グループ）

2021年初頭に、トランスジェンダーのメンバーを一切含まない元アスリート（元オリンピック選手を含む）やスポーツマネジメントアナリストにより創立。当グループは不十分なデータを根拠として政策提言を行い、現行のNCAA およびIOC基準に異論を唱えるほか、トランス女性はシスジェンダー女性に比べ、先天的に運動面で優位に立っている、という誤った主張をしています。しかしこのような主張は、科学のおよび現実世界の競技会での実証に反しています。

日本のLGBTQ+の状況

オリンピック開催を契機に、LGBTQ+支援者によるLGBTQ+コミュニティ保護を訴えるキャンペーン活動がより活発になりました。これまで日本のLGBTQ+コミュニティは様々な文化的障害に直面してきました。調和や同質性、適合といったことを重んじる文化的価値観に、自分たちのアイデンティティーが反していると感じたためです。それがここ数年で急激に日本でも受け入

れられるようになっており、東京でのオリンピック・パラリンピック競技大会の開催が発表されて以来、特に、差別禁止や結婚の平等を保障する法律成立を目指してLGBTQ+コミュニティへの認識と意識を高めようとする団体がいくつも設立されました。



日本政府は性的指向や性自認を理由とする差別を禁止する法をまだ制定していません。日本のトランスジェンダーの人々は2004年から法的な性別を変更することが許されていますが、その手続きには辛く差別的な要件が含まれています。この法律では申請者が二人以上の医師の診断を受け、不妊化の外科手術を受けなければなりません。また申請者は独身であり、20歳未満の子どもを擁していないことが条件です。

地方自治体は証明書発行などにより、公式文書上では同性の者同士の関係を結婚に相当する関係と認める条例や要項を可決し、地方裁判所は政府の同性婚禁止は違憲であるという判決を下しました。これは精神的な勝利ではありますが、法的な拘束力をいまだ持っていません。また、国の性教育カリキュラムには性的指向や性自認の多様性に関する情報は含まれていません。

2018年、東京都はLGBTQ+の人々を保護する重要な条例を成立させました。これはオリンピック憲章と国際人権基準に沿ったものです。しかしオリンピック競技には、マラソン、ゴルフ、フェンシング、競歩、サーフィ

ン等、東京都以外の場所（北海道、埼玉県、千葉県、静岡県、神奈川県、宮城県、福島県）で開催されるものがあり、LGBTQ+であるアスリートやファン、そしてビジターは、これらの道県では東京都の差別禁止条例で保護されません⁵³。

ヒューマン・ライツ・ウォッチ（NGO国際人権組織）、J-ALL（日本LGBT法連合会）、アスリート・アライ（スポーツ界におけるLGBTQ+サポート団体）、及びオール・アウト（愛と平等を提唱するグローバル運動）は協働し、日本政府にLGBTQ+当事者を差別から保護する法案をオリンピック前に導入、制定するよう求めるEquality Act Japanという運動を行っています。政府にLGBT平等法の可決を求める請願書には、これまで10万人以上の人々の署名が集まりました。コカ・コーラ、デロイト トーマツ、EY、インテル、マイクロソフト、PwC、セールスフォース、ペプシコ、セガサミーホールディングス等、国内外の大手企業も、この法案を支持しています。残念ながら平等法の可決は前国会会期中には叶いませんでしたが、この運動は今後も続きます。

53 <https://www.hrw.org/equalityactjapan>

日本のLGBTQ+サポート団体

日本スポーツとジェンダー学会(JSSGS)

日本スポーツとジェンダー学会の目標は「スポーツにおける男女平等、公平の達成」「ジェンダー・バイアスのないスポーツ文化の構築」であり、学術フォーラムや、メンバーおよび関係組織間の協力推進を通してこれらの達成を目指しています。

プライドハウス東京

2018年より、プライドハウス東京コンソーシアムはLGBTQ+等、性的少数者に対する理解を深め、ジェンダーや性的指向、性自認に関わらず、すべての人々が安心できる環境作りに取り組んでいます。プライドハウス東京レガシーは2020年10月11日に新宿でオープンした常設の総合LGBTQ+センターです。そのイニシアティブは、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の大会ビジョンの一つである「多様性と調和」に共鳴するものであり、同競技大会の公認プログラムの一部として認識されています。

LGBT法連合会

「一般社団法人 性的指向および性自認等により困難を抱えている当事者等に対する法整備のための全国連合会」が正式名称。

Marriage for All Japan —結婚の自由をすべての人に

一般社団法人 Marriage For All Japan —結婚の自由をすべての人に (MFAJ)は日本において婚姻の法的平等を達成する運動を行っている団体です。MFAJの主な活動は、ウェブサイトとSNSを通じて、MFAJ自身の活動と日本における結婚の平等の最新動向についての情報を提供し、結婚の平等に対する人々のサポートを求めるイベントを開催したり、「結婚の自由をすべての人に」訴訟に対する支援を行ったりしています。「結婚の自由をすべての人に」訴訟は、同性婚を禁止する現行の法律の違憲性を訴えるものです。MFAJはまた、国会議員との会談や国会での院内集会など、数々のロビー活動にも関わる一方で、大手企業と協力し、同性婚の法制化(婚姻の平等)に賛同する企業を可視化する「Business for Marriage Equality」キャンペーンも実施しています。

LGBTとアライのための法律家ネットワーク(LLAN)

LGBTとアライのための法律家ネットワークは、実務法律家による非営利団体です。その使命は、性的指向や性自認に関係なく、すべての人々が安心してその能力を最大限に発揮することができる平等社会の実現にあります。法的支援や企業の意識を高めるためのイベントを主に行っており、例としてLGBTQ+に関する国連の企業行動基準の日本でのローンチイベント(2018年)、現在120を超える企業が支援する、在日米国商工会議所による「結婚の平等に関する見解」のローンチ(2019年)、また日本における結婚の平等とLGBTQ+インクルージョン(包摂)に関するOPEN FOR BUSINESSによるレポートの発表(2020年)に携わりました。

日本のLGBTQ+ アスリート

日本の同調文化や集団主義という文化的価値は、カムフライトしようとするLGBTQ+アスリートにとって課題となり得ます。世界中のあらゆる場所と同じく、日本のLGBTQ+アスリートも、本来の自分を公表することでファンから反発を受けることを恐れています。一方で、ここ数年、差別禁止法や婚姻の平等などのLGBTQ+の保護を強める法律の成立に向けた運動と共に、自身のアイデンティティを公表するLGBTQ+アスリートは増えています。

下記のアスリートの多くは、近年カムフライトしたばかりです。メディア関係者は、オリンピックおよびパラリンピックが、どのようにLGBTQ+アスリートのカムフライトのきっかけを作り、LGBTQ+アスリートの認知度を高め、LGBTQ+コミュニティのさらなる保護を呼び掛けるきっかけを作ったかについて、ぜひ掘り下げてください。

杉山文野 (三人称 he/him、フェンシング)

杉山氏は、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会のわずか数週間前、日本オリンピック委員会理事に就任した最初のトランスジェンダーメンバーとなりました。2004年および2005年にフェンシング日本女子代表として活躍した後、2006年に引退し、自身がトランスジェンダーであることを公表しました。それ以来LGBTQ+の啓発活動を行っています。

村上愛梨 (三人称 she/her、ラグビー)

31歳のラグビー選手であり、ラグビー日本代表チームに選ばれた実績があります。村上氏は2021年に同性愛者であることをカムフライトし、同性のパートナーと交際中であることも発表しました。

菊池真琴 (三人称 she/her、ボクシング)

2018年日本女子ウェルター級王者のプロボクサーである菊池氏は、2021年にレズビアンであることをカムフライトしました。

下山田志帆 (三人称 she/her、サッカー)

下山田氏は、ドイツでサッカーのプロ選手として活躍していた2019年に、同性のパートナーと交際中だとカムフライトしました。ドイツは自身の性的指向を公表するのにより安全な場所だと感じたと言っています。

横山久美 (三人称 he/him、サッカー)

元日本代表ストライカーであり、米国でプロ選手として活躍する横山氏は、2021年にトランスジェンダー男性であることをカムフライトしました。

GLAAD（グラード）について

グラードはLGBTQ+当事者が社会から排除されないように、物語の筋書きを書き直す団体です。ダイナミックなメディアの力を活用して、困難な課題に取り組み、物語を作り、文化的な変化を起こす対話を促します。これまでに達成してきたものを守り、誰もが自分の愛する人生を生きることができる世界を創ります。詳しくはwww.glaad.org、またはフェイスブックやツイッターをご覧ください。

お問い合わせ先: press@glaad.org

アスリート・アライについて

アスリート・アライは、スポーツがすべての人々に開かれ力を与える時、世界は変わると信じます。米国内有数の非営利団体として、スポーツとLGBTQI+の接点で活動している当団体は、スポーツ界のLGBTQI+の人々を孤立させ、排除し、危険に晒す構造的および組織的な抑圧を終わらせるために活動しています。個人や団体の教育を通して、LGBTQI+の人々のインクルージョンの障害となっているもの、そしてLGBTQI+の人々がいかにアスリートコミュニティの中で排除されずインクルーシブな文化を築いていくかについて理解を図るほか、スポーツ団体、チーム、リーグなどが、所属選手の多様性を反映した規定を確実に導入するよう努めています。スポーツ界において、そしてスポーツを通してLGBTQI+の平等を進めるためにアスリートが行う活動をサポートしています。詳しくはwww.athleteally.orgをご覧ください。フェイスブック、ツイッターまたはインスタグラムでフォローしてください。

お問い合わせ先: press@athleteally.org

プライドハウス東京について

2018年より、プライドハウス東京コンソーシアムはLGBTQ+等、性的少数者に対する理解を深め、ジェンダーや性的指向、性自認に関わらず、すべての人々が安心できる環境作りに取り組んでいます。プライドハウス東京レガシーは2020年10月11日に新宿でオープンした常設の総合LGBTQ+センターです。そのイニシアティブは、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の大会ビジョンの一つである「多様性と調和」に共鳴するものであり、同競技大会の公認プログラムの一部として認識されています。

お問い合わせ先: 松中権 gon@goodagingyells.net

Outsports.comは、LGBTQ+関連スポーツニュースの主要な情報源です。

お問い合わせ先: Outsports@gmail.com



ATHLETE ALLY

